

2024年度 一般選抜問題
前期B日程 2024年1月21日(日)

選 択 科 目

(数学・基礎理科・物理・化学・生物・日本史・世界史・国語)

数 学	1～ 6ページ
基 礎 理 科	7～ 30ページ
※2科目選択して1科目の扱いとなります。	
物 理	31～ 45ページ
化 学	47～ 58ページ
生 物	59～ 75ページ
日 本 史	77～ 87ページ
世 界 史	89～102ページ
国 語	103～116ページ

注 意 事 項

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
2. 3科目型の受験生および3科目型と2科目型を併願する受験生は上記の科目から2科目を、2科目型の受験生は、上記科目と英語から2科目を選択してください。但し受験票に記載された科目以外を受験すると0点となります。
3. 解答用紙には、「**数学**」(青色)と「**基礎理科**」(赤色)と「**数学・基礎理科以外**」(赤色)の3種類があります。
4. 試験開始後、解答用紙に受験番号と名前を必ず記入し、受験番号をマークしてください。数学以外の科目については、解答する科目を選び、科目の右にマークしてください。また解答科目欄に科目名を記入してください。正しくマークされていない場合は0点となります。
5. 解答はすべて解答用紙の解答欄にマークしてください。「**基礎理科**」の解答用紙は2科目を選択し、科目ごとに決められた解答欄にマークしてください。3科目に解答した場合は0点となります。
6. 問題用紙の余白は計算に使用してもかまいませんが、解答用紙を汚してはいけません。
7. 試験開始後、問題用紙・解答用紙に落丁・損傷がないか確認してください。
8. 数学の問題の冒頭には「**解答上の注意**」が記入されていますので、必ず読んでから解答してください。
9. 試験終了後、問題用紙は持ち帰ってください。

国語

1 次の問い（問1～4）に答えなさい。

問1 ア～エの傍線部のカタカナに相当する漢字と同じ漢字を含むものを、次の各群の①～④の中からそれぞれ一つ選びなさい。

ア ジュンタクな予算が研究を下支えする。 1

- ① 警備員がビル内をジュンカイする。
- ② ホウジュンな大地で農作物を育てる。
- ③ 生物多様性条約のヒジュン国を調べる。
- ④ ジュンドの高い金ほど柔らかい。

イ サヨナラ負けを呼んだツウコンのエラー。 2

- ① ゲノムに残された旧人類のコンセキを調べる。
- ② 入植者が荒地地をカイコンして畑にする。
- ③ ヒンコンな発想ではイノベーションは起こせない。
- ④ 犯行の動機はエンコンと見られる。

ウ 挑戦者は判定によりキンサで敗れた。 3

- ① 自宅でのキンシンを命じられる。
- ② 彼女の演奏は心のキンセンに触れた。
- ③ 社員のキンゾク年数を確認する。
- ④ 人気の展覧会の図録が残部キンショウとなる。

エ リョウカイの範囲内を航行する。 4

- ① 仕事の休憩時間にドウリョウと連れ立って昼食に行く。
- ② 「リョウユウ並び立たず」でどちらかが倒れる。
- ③ 夏の夜にノウリョウのイベントを企画する。
- ④ 得意な科目の試験でホンリョウを発揮する。

問2 ア・イの四字熟語の空欄 5、6 に入る漢字を、次の各群の①～④の中からそれぞれ

れ一つ選びなさい。 5、6

ア 阿鼻叫 5

① 勘 ② 歎 ③ 喚 ④ 憾

イ 二律 6 反

① 排 ② 背 ③ 廢 ④ 配

問3 ア～ウの慣用表現の空欄 7、8、9 に入る漢字を、次の①～⑨の中からそれぞれ一

つ選びなさい。 7、8、9

ア 得手に 7 を揚げる

イ 精 8 尽きる

ウ 二の 9 が継げない

① 根 ② 帆 ③ 匂 ④ 魂 ⑤ 神

⑥ 足 ⑦ 旗 ⑧ 穂 ⑨ 苦

問4 ア～ウに該当するものを、次の各群の①～④の中からそれぞれ一つ選びなさい。

10、11、12

ア 大江健三郎の著作 10

① 『飼育』 ② 『道化の華』 ③ 『アメリカン・スクール』 ④ 『裸の王様』

イ 柳田國男の著作 11

① 『死者の書』 ② 『遠野物語』 ③ 『不機嫌の時代』 ④ 『私の個人主義』

ウ 坪内逍遙や二葉亭四迷が始まりとなった文学思潮 12

① 浪漫主義 ② 反自然主義 ③ 擬古典主義 ④ 写実主義

2 次の〈文章Ⅰ〉と〈文章Ⅱ〉を読んで、後の問い（問1～6）に答えなさい。

〈文章Ⅰ〉

〔注〕フランクルは、未来にある意味を仮託することが、あるいは少なくとも未来の視点に立つて現在を見ること、そのひとをkarouうじて自己崩壊から救うということについて、ナチの強制収容所での体験から、語れるぎりぎりの記述をしている。収容所の中で未来をかりそめにも信じていることができる者は、いくばくか生き延びることができた。もつともそれがじぶん自身に対するトリックでしかないのはあきらか、フランクル自身は皓皓と照らされた大きな講演会場で大勢の聴衆を前に強制収容所の心理学について講演しているじぶんを空想したのだった。が、このトリックが破綻したとき、さらに深い絶望が待っていた。ひとは未来を失うとともに、「内的に崩壊して」いったのであった。こうした危機はたいいてい、つぎのようなかたちで始まった。

当の囚人はある日バックに寝たままで横たわり、衣類を着替えたり手洗いに行ったり点呼場に行ったりするために動くことはしなくなる。何をしても彼には役立たない。何もかも彼をおどかすことはできない——懇願しても威嚇しても殴打しても——すべては無駄である。彼はまたそこに横たわり、殆ど身動きもしないのである。そしてこの危機を起したのが病気であれば、彼は病舎に運んで行かれるのを拒絶するのであり、あるいは何かして貰うのを拒絶するのである。彼は自己を放棄したのである！ 彼自身の糞尿にまみれて彼はそこに横たわり、もはや何ものも彼をわずらわすことはないのである。『夜と霧——ドイツ強制収容所の体験記録』霜山徳爾訳

こういう危機が一気に押し寄せるのは、クリスマスから新年にかけてだという。一九四四年のクリスマスから四五年の新年にかけても、それまでになかったほど大量の死者が出た。「この大量死亡の原因は単に囚人の多数がクリスマスには家に帰れるだろうという、世間で行われる素朴な希望に身を委せた事実の中に求められる」とフランクルは書いている。「何故生きるかを知っている者は、殆どあらゆる如何に生きるか、に耐える」。が、なおも生きることの意味が消えてしまうと、ひとは「抛り所」を失い、やがて倒れてゆく。これに対し、絶望の淵にあつていかなる慰めのことばをも拒絶する人びとに典型的な口のきき方は、次のようであったという。「私はもはや人生から期待すべき何ものも持っていないのだ」。この問いかけに対してわたしたちはいったいどんなふうに応えることができるだろうか。

フランクルは、「ここで必要なのは生命についての問いの観点変更である」と答える。「人生から何をわれわれはまだ期待できるかが問題なのではなくて、むしろ人生が何をわれわれから期待しているかが問題なのである」と。

この「観点変更」がわたしたちにとって興味深いのは、ここでわたしたちは人生の意味を問う者としてではなくて、それを「問われた者」として体験されると言われているからである。フランクルは言う。「人生は彼らからまだあるものを期待しているということ、すなわち人生におけるあるものが未来において彼等（かれら）を待っているということを示すのに私は成功したのであった。事実一人の人間には、彼が並外れた愛情をもっている一人の子供が外国で彼を『待っていた』のであり、他の一人には人間ではないが他のものが、すなわち彼の仕事に『待っていた』のである」。だれかに「待たれる」という受動性がここでひとをkarouうじて支える。だれかが、あるいは何かがじぶんを「待っている」という確信、これしもがしかし奪われたとき、ひとはいかにして「なお生きる」ということに耐えられるの

だろうか。死なないでいる理由をどこに見いだすことができるだろうか。

ここで苦しみそのものを「受難」とか「犠牲」といったキリスト教的な解釈のなかで意味づけるのはつらい。あるいはその苦しみを、苦悩をたとえばフランクルのように「苦悩しぬく」という^(注2) homo patiens の「つらなみ」として、意味のなかで回収するのも息苦しい。むしろ地べたにはいつくばって、苦しいのはおたがいさま、とでも言いあっていたい。英語のヒューマン human という語は、フムス humus という、地面とか腐食土を意味するラテン語からきている。人間はこの地上の被造物であるということでもヒューマニティ humanity と呼ばれる。よく似た単語に、ヒューミリティ humility がある。謙虚さという意味だ。じつは、これもまた humus を語源としている。こちらは、地面に近い、それほど低いということから謙虚の意になる。慎ましやかととも、なさけない、卑しい、みすぼらしいを意味するハンプル humble も、やはり humus (腐食土) を語源としている。あくまでみずからの存在の低さにあきれるそういう苦笑のなかで、ホスピタブルでありたいとおもう。苦悩により「ゆたかな」意味を求めるような「苦しみ」の概念には、やはり抵抗がある。荷物が重くて喘いでいるひとの荷物を半分持つてあげるように、他者の苦しみをいわば半分分かち持つこと——シンパシーはもともと「ともに苦しむ」という意味である——、ホスピタリティのこのような概念には、「なにかお手伝いできることがありますか？」(Can I help you?) といった、軽いことはむしろ対応させてみた⁽¹⁾。

他者の現在を思いやること、それは分からないから思いやるんであって、理解できるから思いやるのではない。料理を供する母は、じぶんではなく「あなた」の口に合うか、それがとても気になるから「おいしい？」と訊くのであり、「おいしい」という返事をもらうことで、じぶん自身の行為にはじめてポジティブな意味をあたえることができるのである。

こんな単純な事実を引きあいに出したのは、生きる理由がどうしても見当たらなくなったときに、じぶんがほんとうに生きるにあたいする者であることをじぶんに納得させるのが、思いのほかむずかしいからだ。そのとき、たとえば死への恐怖ははたらいても、倫理や道徳ははたらかない。生きるということが楽しいものであることのたつぷりとした経験、そういう人生への肯定が底にないと、ひとはじぶんが死なないでいることをじぶんでは肯定できないものだ。「子供の教育において第一になすべきことは、道徳を教えることではなく、人生が楽しいということを、つまり自己の生が根源において肯定されるべきものであることを、体に覚え込ませてやることである」と永井均もその著『これがニ―チェだ』のなかで述べている。

しかしこの経験がたつぷりとはできなかつたらどうか。そのときには、他者がそれを贈るのである。花束を差し出すようにして。

「わたし、ほんとに、生きていいんですか？」

「いいんだよ、おまえは、そのままだ」

他者をそのままそっくり肯定すること、条件をつけないで。カントのいうような無条件の命令(定言命法)ではなく、無条件の肯定である。こういう贈り物ができるかどうかは、ふたたびそのひとが、つまり贈るひと自身が、かつてたつた一度きりであっても、無条件でその存在を肯定された経験があるかどうかにかかっている。おりこうさんだったらか、静かにしていたらとか、そんな留保条件なしに、その存在が全的に肯定されること。乳首をたつぷりふくませてもらい、乳で濡れた口許を拭ってもらい、落としたおもちやを拾ってもらい、便にまみれたお尻を上げてふいてもらい、髪を、顎の下、脇の下を、指の間、腿の間を洗い洗ってもらった経験。相手の側からすれば、他者の存在

をそっくりそのまま受容してなされる「存在の世話」とでもいうべき行為である。ケアの根っこにあるべき経験とはそういうものではなかるうか。ひとは生きるために、その生涯の出発点で、他者からの援助を必要とする。見棄てられたという感情、寄る辺ないという感情 (Hilfsigkeit) が、ひとの存在から生きる力を奪ってしまうのは、そういうわけである。

〈文章Ⅱ〉

ある本のなかで、特別養護老人ホームの指導員のひとの、とても印象的なことばにふれたことがある。

人は自らの最期をどこで迎えるべきか、という問いに対し、普遍的な答を用意することは不可能でしょう。また本人の決定権を重視するといっても、その人が本当に息絶える瞬間の気持ちは誰にもわからないでしょう。つまり、人の最期の迎え方は千差万別であり、それは本人のそれまでの生き方によって決定されるべきであると考えます。例えばそれまでずっと『医者ぎらい』であった人が終末期において自らの意志を伝えることが不可能になったため、最高の医療のもとで命途絶えたとし、それは満足といえるでしょうか。

ターミナルケアの本質は、(延命的) 医療行為をすべきかとか、どこで迎えるか等ではなく、最期を『誰と』迎えるかであると考えます。もう少しいうと、『独り』もしくは『諸機器だけの中で』息途切れるのは、余りにも寂しいということです。少なくとも施設でのターミナルケアの本質はそこであると考えます。

わたしたちはその生の始めと終わりに、他人とともにこのじぶんの生に触れる。そのとき重要なことは、なにかのためではなしに、ただここにともにいるのであって、それ以上でもそれ以下でもないという、ただそれだけの事実のなかで、だれかとともにじぶんの最期を迎えるということである。

右のことが引かれていた広井良典の著作『ケアを問いなおす』は、わたしのいう、意味の外部で他者に触れるということを、別の表現で語りだしている。「時間をあげる」という表現である。「誰でも、自分が好きな人、あるいは大切と思う相手に対しては時間をさくのをいとわない一方、そうでない相手に対しては時間を過ごすのを極力減らそうとする。こうしたことから考えると、ケアとはその相手に(時間をあげる)こと、と言ってもよいような面をもちえる。あるいは、時間をともに過ごす、ということ自体がひとつのケアである」。つまり、「いる」というのはゼロではない。なにかをしてあげないとプラスにならないのではない。

(〈文章Ⅰ〉〈文章Ⅱ〉はともに鷺田清一『「聴く」ことの力——臨床哲学試論』による。)

(注) 1 フランクル——一九〇五〜一九九七。オーストリアの精神科医。

2 homo patiens——『苦悩する人間』を意味するフランクルが提唱した語。

問1 傍線部A「何故生きるかを知っている者は、殆どあらゆる如何に生きるか、に耐える」とあるが、どういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

13

- ① じぶんがだれかに待ってもらっている存在だと認識できた者は、人生におけるあらゆる困難を克服することができるということ。
- ② じぶんに未来があると信じて生きている者は、わが身に降りかかったたいいの不幸を乗り越えて生き延びようとする意欲を持つということ。
- ③ 自己が社会に対し何をすべきかその目的を知っている者は、いわれのない責め苦や困難であつてもおおむね受忍できるということ。
- ④ 未来を信じている者は、殴打や病などを意に介さない自暴自棄に見える態度を取つても最後まで生き延びるということ。
- ⑤ 困難の後に待っているクリスマスのような幸福を信じることが出来る者は、そこまで厳しい生活苦にあえいだとしても我慢できるということ。

問2

傍線部B「それを『問われた者』として体験される」とあるが、どういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

14

- ① 人生から何を期待して生きるのかという受動的な考え方を捨てて、人生が何をわれわれから期待しているかを問うという方針転換を行ったということ。
- ② 子供や仕事がいぶんを「待っている」という確信を得ることを、不幸なことに収容所という自己の存在意義を問われるような場で体験したということ。
- ③ 人生に絶望しているひとに生きる意味を問われているまさにそのさなかに、受動性こそがひとの生きる意味であるという観点変更に思い至ったということ。
- ④ 生命についての問いの観点変更をみずからの意思で行うのではなく、ナチおよびその強制収容所の強制によって考えざるを得なくなってしまったということ。
- ⑤ 生きる意味を人生に見いだそうとする能動的な思考から、他者や何かから未来のじぶんの存在が期待されているのだという受動的な思考に転換するということ。

問3

傍線部C「軽いことばをむしろ対応させてみたい」とあるが、筆者がこのように述べるのはなぜか。その理由の説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

15

- ① 人間は苦しみをたがいに分かち合える存在であり、ささやかな声かけで相手を思いやることができると考えているから。
- ② ひとをもてなすという局面においては、堅苦しい言葉よりも謙虚な言葉遣いこそが適切と思っているから。
- ③ 敬語を使ったり威圧的な態度を取ったりすることは、苦しむひとをさらに苦しめるということを認識しているから。
- ④ ひとはだれかの苦しみを理解できないので、苦しんでいる当人が望むことを尋ねるしかないと自覚しているから。
- ⑤ 表現を工夫しても苦しみそのものは消えないが、おたがいさまの精神こそがひととたらしめると考えているから。

問4

傍線部D「花束を差しだすようにして。」とあるが、「花束」とは何をたとえたものか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

16

- ① みずからを生きるにあたいする存在だと自覚して強く生きている者を後押しする力。
- ② 自身の経験を肯定できないでいるひとに、外部からその経験を認めてあげるための言葉。
- ③ 苦しみを伴ったり正義を貫いたりするためのものではなく、楽しいものとしての生。
- ④ 生きることに否定的なひとに贈る、あなたを無条件に肯定しているというメッセージ。
- ⑤ 子供の頃の経験の中で見いだされ、人生のどこかの局面で花開くであろう才能。

問5

傍線部E「ケアの根っこにあるべき経験とはそういうものではなかるうか。」とあるが、〈文章Ⅱ〉の内容も踏まえると、筆者はどういうことを言おうとしているのか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

17

① いかにも表面的に相手の全存在を肯定しているように見えても、ケアの対象は最終的に死を迎えるのだという覚悟を根っこの部分で持てなければ、相手との信頼関係は構築できないということ。

② ケアは実際には具体的な支援の行動を伴うものであるが、どこで、どのようにケアするかという手段や方法よりもまず、相手の生を受容し、「時間をあげる」ようにともに過ごすことが大事なのだという事。

③ 他者をそっくりそのまま肯定するという精神を心の奥底で持っていないと、日々のケアをいかに充実させたとしても、どんなときもいっしょにいてあげるといふ献身はどうしても不可能だということ。

④ 死に瀕するひとが納得のいく形で生を全うできるように、ケアする人間は相手のそれまでの生き方を十分に理解するためにも、まず相手の言い分を全肯定し、意思を受容する姿勢が必要だということ。

⑤ 体をきれいにしたり身の回りの世話をしたりという、いわば〈時間をあげる〉という行為をケアの中心に据えないと、その他のケアがいかにもうまくいっても本質的にはお世話をしたことはないということ。

問6

高校生五人が〈文章Ⅰ〉と〈文章Ⅱ〉を読んで話し合った。〈文章Ⅰ〉と〈文章Ⅱ〉の内容を踏まえた発言として**適当でない**ものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

18

① 生徒A：フランクルは自分自身の経験から、生きることを放棄する、逆に言うところ死に向かってしまうひとの心理状態に考えが至ったんだね。未来を信じていることができない者は過酷な生活やその先にある死にも抵抗しないようだよ。

② 生徒B：人生の目的というものは、じぶんがじぶんのために見いだすものだとばかり思っていたけれど、どのような形であれ他人から求められる存在であることが当人の生きる意味になりうるというのは新たな気づきだったな。

③ 生徒C：筆者が述べている、ひととひとは同じ地平を生きる者同士であり、謙虚で「低い」存在としておたがいを思いやるのだという人間観は、ヒューマンという語の語源や派生語を見ていくことでも明らかにされていたね。

④ 生徒D：ひとが生きる理由を他者に説くことよりも、じぶんは生きるにいたいするものだともみずから得心することの方が思いのほか難しいと言っていたよ。だからこそ、ひとは他人から無条件に肯定されることを求めてしまうんだね。

⑤ 生徒E：祖父が亡くなるまでの数か月間、私はお見舞いに行くことしかできなかったのだけれど、ただそこにいることが大事だという筆者の主張は心に響いたよ。ともに過ごすことがケアになるといふ考えに救われるひとは多いと思うな。

3 次の文章を読んで、後の問い（問1～6）に答えなさい。

恭平は妻・京香が亡くなった後、一人娘の志乃をベビーシッターの資格を持つ友人の力を借りながら育てている。恭平と志乃は京香の墓参りをしたが、妻の死と向き合うために恭平だけが遺骨の入った骨壺を見ていた。その後、陶芸家である京香の父の元を久しぶりに訪問している。

「志乃ちゃんはまだ寝た？」

「はい。疲れてたみたいで、すぐに寝ました」

「だいぶ眠そうだったもんね」

木製の丸椅子を出してもらったので、礼を言って腰かける。義父はろくろの上にあつた、作つたばかりの大皿を脇に移動させていた。木製のヘラやコテ、スポンジなど、作陶のための道具がいろいろと載っている作業台の上を何気なく見ているうちに、黒い石でできた熊の形のペーパーウェイトが目にとまる。それは何年前か前の父の日に、京香が義父にプレゼントしたものだ。一緒に買い物をしているときに「これどう思う？」と意見を求められたから覚えている。

「その熊は京香にもらったんだよ」

知っていますとは伝えずに、手を伸ばして取り上げた。片手で持てるサイズのものだが、腕が自然と下がるくらい、ずっしりとした重みがある。背中部分を指でなぞると、石の冷たさとはまた別に、京香の温もりのようなものがわずかに残っているように感じられた。

「もう一年になるね」

義父はろくろの前の椅子によく腰を落ち着けた。そうですね、とうなずきながら熊を元の場所に戻すと、恭平くんは大丈夫かと俺を気にかけるようなことを言ってくる。その口元には相手を思いやるような笑みが浮かんでいたが、吐き出された溜め息には疲労感が混じっていた。

「僕はまだずっとと苦しい。子どもを亡くすのは特別な苦しさがあるっていうか……何のために生きているのかわからなくなる」

うつむいている義父にかける言葉をすぐには見つけることができなかった。死というものを持つ重力が、体をいつもよりも重くしているように感じられる。でも、それはあくまでも、ほんの数秒のことだった。虫たちの声がまた戻り、見慣れた自分の手が膝の上にある。

義父は長い沈黙のあとで、「子どもというのはすごいもんだよ」と感服したように言った。自分の命よりも大事なものができてしまう、というのがその理由らしい。

「もちろん、そうじゃないって親も中にはいるのかもしれない。でも、ちゃんと愛情を持って、迷い悩みながら子どもを育ててきた親の多くは、みんなそう言う。そう思わせる何か、子育ての中にあるんだろうね」

B 言っていることは理解できるが、引け目を感じた。俺が黙り込んでいるのを見て、どうかしたのか、と義父が声をかけてくる。

「いや、お義父さんの言われたことが、自分には当てはまらない気がしたんです。もちろん志乃が大事であることに違いはないんですけど、俺は子育てを京香に任せっきりにして、仕事にかまけてきた人間なので。そんな自分が、今は少しは志乃をみるようになったとはいえ、本当に子どものことをちゃんと愛せてるのかなと思って」

焼き鳥屋で新田と話したときの自惚れが今でも忘れられなかった。自分は何かを知って、理解した人間だと思っていたが、実際には行動のともなわない理想論を口にして、マウントを取っていただけだったのだ。だから志乃のことだって、大事にしていると言いながらいい加減にしか考えていない可

能性は十分にある。

「恭平くんは陶芸をやったことはあるか。」

「え?」

「今ちよつとやってみたい? ^c土を触ると ^b気持ちが悪くなるよ」

^a脈絡のない誘いに困惑する俺をよそに、義父は立ち上がって早くも準備を始めていた。新しい粘土がろくろの上に置かれ、再び椅子に座った義父が粘土の側面を両手で叩いている。回転を始めたろくろの上で、粘土をゆっくりと引き上げるように伸ばしては、また押さえ付けて元の大きさに戻していた。こうすることで土の密度が均一になって成形しやすくなるそうだ。

「どうぞ?」

形を整えた粘土を台の上に残すと、義父はそう言いつて椅子から離れた。予備のエプロンを渡され、こゝまでされると断ることもできなくて、半ば押し切られるようにろくろの前に腰を下ろす。

「湯呑みでも茶碗でも、なんでも好きなものを作つていいよ。ただ、事前にイメージは持つておいた方がいいかも。頭の中にはないものは作れないから」

そんなことを言われても、^d湯呑みも茶碗も別に作りたくはない。少し考えてみたものの、やっぱり何も浮かばないので、とりあえず湯呑みでいいかと思った。

袖をまくって足元のペダルを踏み、回転を始めた粘土に両手で触れる。手の中でぬるぬると土がすべっていくのが思いのほか気持ちよく、子どもの頃にしていた泥遊びを思い出した。義父の助言に従って、あらかじめ作つてあった中央のくぼみに両手の親指を突き立てる。このくぼみを少しずつ深くしていけば、とりあえず器の形にはなるらしい。

いったん手を離して体を起こし、回り続ける半端な形の器を眺めているうちに、ふいに意識にのぼってくるものがあった。できるかどうかかわからないが、どうせ作るならやってみるか、そのイメージを頭に留める。作りたいものが決まると、それを実現させたい気持ちが出てきて真剣になった。昼間義父がやっているのを見たときは簡単そうに見えたのだが、実際にやってみると、あれは熟練の技なんだというのがわかる。特に両手の指で中と外から粘土を挟んで、微妙な力加減をしながら自分の思う形を成形するのが難しかった。洗面器に張られた水で指を濡らしつつも、まだまだ頭の中の完成図にはほど遠いことを思い知る。

それから十五分ほどかけて自分なりに試行錯誤を重ねたが、できあがったのはイメージしたものかほど遠い、壺よりずっと小振りな「かめ」のようなものだった。大きさも中途半端で、形も微妙に歪んでいるし、何よりも肝心のふたがない。

「^eあんまり納得してないみたいだね」

近いものならできると思っていた自分の浅はかさを笑いたくなくなった。あんな難易度の高いものを作るうとしたの?」

「……骨壺です」

「骨壺?」

「前に、京香の骨壺をお義父さんが作られていたのを思い出したので、自分も作つてみたくなって」
危うく実物を見たことを言いそうになる。義父は驚いていたが、さっきまでの俺の真剣さに敬意を払つてくれたのか、「なるほど、たしかに僕の作つたものと似てるね」とお世辞を言った。不出来でもその道のプロが認めてくれたからか、実際に骨壺を前にしているような ^f静謐な沈黙が広がっていく。

小さなざわめきが少しずつ大きくなっていくように、^c激しい後悔の念が湧いてきた。こんなものを

作って、妻の死を悼んだつもりか？ 俺はもっと早く京香の墓参りに来るべきだったのだ。彼女がもういないことを受け止めて、自分が志乃を育てていくんだということを自覚するべきだった。

「恭平くん、少し変わったね」

隣に立っている義父が独り言のように言ったので「え？」とその顔を見返した。思ったことがつい口から出てしまったのだろう、弁解するように「あ、いや」と首を振りつつも笑っている。

「こんな言い方は失礼かもしれないけど、僕の知っている君は、こういうものを作ったりする人じゃなかったから。ちよつとびっくりしたんだよ」

たしかに以前の俺は、骨壺を作るような男ではなかった。もちろん京香が生きていたからそれは当然なのだが、もっと広い意味で、死者などという目に見えない存在に重きを置くような人間ではなかったのだ。でも、結局はそれが、愛や親子の絆きずなといった、同じように目に見えない大事なものを俺から遠ざけていたのかもしれない。何より、志乃を自分が育てるといふ当たり前のことを受け止められるようになるまでに、一年という時間を要したのは、かなり情けないことと思える。

「注」昼間も言ったけど、それは僕も同じだったよ」

義父は励ますように言うと、その場にかがみこんで俺の作品をじっくりと眺めた。

「D」なににせよ、この骨壺はとても素敵だと思う」

客間に戻ると、志乃は布団をかぶっていなかった。自分で引っぱり出したのか、お腹なかが丸出しだったので、寝間着の裾をズボンの中に入れてやる。胸の辺りまで布団をかけてやってから、横であぐらをかいて寝顔を眺めた。義父はああ言ってくれたが、こうして志乃の隣にいと、自分が変わったよfうな気はしなかった。ただ、骨壺を作ったということだけが、硬い石を呑み込んだかたいいしをのみこんだように胃の辺りで事実として残っていた。
(白岩玄『プリテンド・ファーザー』集英社による。)

(注) 1 新田——恭平が働く会社の社員。焼き鳥屋で話をした際、旧来的な男女の役割分担を主張する新田に、恭平は反論していた。

2 マウントを取っていた——自分の正しさや優位をアピールする」といった意味。

3 「昼間も……同じだったよ」——京香の父も妻を早くに亡くし、京香とその妹を一人で育て上げていた。

問1 傍線部(ア)～(ウ)の語句の本文中における意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つ選びなさい。 19、20、21

(ア) 仕事にかまけて

19

- ① 仕事に誇りを感じて
- ② 仕事にはけ口を求めて
- ③ 仕事にばかり注力して
- ④ 仕事においては負けぬよう
- ⑤ 仕事に逃げるように生きて

(イ) 脈絡のない

20

- ① 意図が今一つ読み切れない
- ② 感情が一切こもっていない
- ③ ふざけているとしか思えない
- ④ これまでの話とつながらない
- ⑤ 突然すぎて理解が追いつかない

(ウ) 静謐な

21

- ① 静かで沈痛な
- ② 静かで穏やかな
- ③ 静かで冷たい
- ④ 静かで気詰まりな
- ⑤ 静かな緊張感のある

問2 傍線部A「死というものが持つ重力が、体をいつもよりも重くしているように感じられる。」とあるが、このときの恭平の様子を説明したものととして最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。 22

- ① 一年弱という時間を経てもなお、娘を亡くした苦しさをぬぐえないでいる義父を前にして、妻の死をまるで昨日のことのように思い出している。
- ② 娘と一緒に墓参りをするので妻への思いは清算できたはずだったが、義父の苦しむ姿を目のあたりにして、改めて大きな喪失感にとらわれている。
- ③ 自分と同様、義父もまた悲しみにくれながらこの一年弱を送ったことに今の今まで思い至らなかった自分の浅はかさに、身体がこわばっている。
- ④ 愛する人の死という現実が義父と自分の上にのしかかり、うつむく義父を慰めようにも、自らもまたその現実の前に言葉を見つけられないでいる。
- ⑤ 比較しても意味がないことは承知しているが、娘の死という重い現実^{おもんばか}に直面している義父は、妻を亡くした自分よりも辛いだろうと慮^{つら}っている。

問3

傍線部B「言っていることは理解できるが、引け目を感じた。」とあるが、このときの恭平の心情を説明したものととして最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

23

- ① 義父の子育て論は素晴らしいものだが、自分と娘の現状を考えるとそのまま受け入れることはできず、反論の言葉を見つけられないでいる。
- ② 義父の発言は得心のいくものであり、妻の生前から迷い悩みながらも愛情を持って娘に接していればよかったと、今更ながらに悔やんでいる。
- ③ 義父の発言はもつともなのだが、妻の生前はろくに子育てに参加せず、今も娘をうまく愛せているか覚束おぼつかない自分は父親としての自信が持てずにいる。
- ④ 義父の言う通りに子どもはすごいものだという思いに早く至っていれば、娘への愛情も確かなものになっていたはずだと、自責の念にかられている。
- ⑤ 義父の発言は表面上は納得がいくが、「そうじゃないっていう親」という言い方に自分を責めるような響きを感じ取り、自分は父親失格だと痛感している。

問4

傍線部C「激しい後悔の念が湧いてきた」とあるが、このときの恭平の「後悔」を説明したものととして最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

24

- ① 妻の死を受け入れて娘を育てていくのだという決意を固めるのに時間がかかっただけでなく、骨壺を作ってみることで妻に対する形ばかりの追悼のようなことをした自分を、後になって嘆かわしく感じている。
- ② 義父の勧めがあったとはいえ、骨壺という死の象徴のようなものを作ってしまったことで妻の死を再認識し、自ら妻の死を受け止めて娘を育てていくという決心を鈍らせてしまったことを悔いている。
- ③ 墓参りに行った際に妻の骨壺を見たことで、陶芸を勧められて骨壺を作ってみたものの、自ら作った骨壺めいたものの不格好さが決意を固めきれない自分に似ているように見えてきて、羞恥心にかかられている。
- ④ 墓参りに来ることにすら時間がかかり、さらには自分の娘を育てるという当然のことに對する決心もなかなかできないでいた自分は、いくらかの変化を義父に認められてもそれにふさわしい人間だとは思えないでいる。
- ⑤ 妻の遺骨を納めている骨壺を見ていたせいではあるが、自分の気持ちを楽にしようと陶芸を勧めてくれた義父の前で、彼にとって娘の死を思い出させるような骨壺を作ってしまった自分のうかつさに呆あきれている。

問5 傍線部D「なんにせよ、この骨壺はとても素敵だと思う」とあるが、恭平の義父がこのように言ったのはなぜか。その理由の説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

25

- ① 骨壺の出来は確かに自分には及ばないものだが、京香に対する愛情が込められた作品であり、見た目からはわからない素晴らしさがあるように思えたから。
- ② 自分の娘を育てていくという決心はまだ確固としたものではないようだが、こうして孫の顔を見せに来てくれるという、前向きな変化があったことをうれしく思ったから。
- ③ 優柔不断なところはあるにせよ、自分の娘を育てていく決心は固まったように思える恭平が初めて作った陶芸作品を、はなむけの意味も込めて褒めてあげたいと思ったから。
- ④ 恭平が本当に変わったのかは自信が持てないが、土を触ってみてはという自分の誘いに乗ってくれたことは、恭平の中で陶芸への興味が芽生えた証あかしのように思えたから。
- ⑤ 子育てに対する自信はまだないようだが、骨壺を作ったことに心境の変化は表れていて、かつての自分のように恭平も悩みつつ前進していくだろうと思えたから。

問6 波線部a～fの内容や表現に関する説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

26

- ① a 「石の冷たさとはまた別に」には、義父へのプレゼントを選んだときのことを単に思い出すのではなく、生前の妻と真摯に向き合ってた一つのエピソードとして後悔とともに回想している恭平の心情が表れている。
- ② b 「吐き出された溜め息には疲労感が混じっていた」には、この時点では恭平の前向きな変化に気づけていない義父の、自分の娘を幸せにしてくれなかった男に対する一種の憎しみのようなものが、わずかににじみ出ている。
- ③ c 「土を触ると、気持ちが楽になるよ」は、ともに大事な人を亡くした人間として恭平を見る義父の優しさから出たもので、自分もまた土を触ることで悲しみを癒やそうとしてきたであろう彼の姿も想起される言葉である。
- ④ d 「湯呑みも茶碗も別に作りたくはない」と恭平が思っていることを義父が見透かしていることは、e 「あんまり納得してないみたいだね」という言葉からわかるが、こうした発言が、明示されない緊張感を作品に与えている。
- ⑤ f 「硬い石を呑み込んだように」は、骨壺という死の象徴のようなものを自ら作り上げてしまったことで、認めていなかった妻の死を受け入れ、志乃とともに生きていくという覚悟の重さに恭平が苦しんでいる様子を比喩的に表現している。